

19歳だったあなたが

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン

「今日のフォーカスチェンジ」第1555※号
(2011年10月7日発行)より

19歳だったあなたが、もう一度、同じ年を繰り返しても、まだ追いつけないくらいの年月を、私は生きてしまいました。

19歳だったあなたの、まあらしい遺影は、いまも、私の目の奥に焼きついているけれど、きっと、あの遺影も、いまは、すっかり色あせていることでしょう。いつのまにか、そんな年月が過ぎてしまいました。

今日、ふと、あなたのことを思い出して、同時に、あなたのことを忘れて生きている自分に気がついて、ほんの少ししろめたさを感じながら、でも、あんなかなしみも、忘れてしまえるほどに、ひとは生きていくちからをもっているのだなあ、そんなふうにも思

ったのです。

10代のころから、なぜか、ひとの死に接する機会がおおかった私です。妹、祖父、そして、友人たち。そのなかでも、あなたの死は、私のところに、ひととき強烈な印象を残していきま

した。
ひとが、今日、生きていることは、奇跡なのだ。生きていることが当たり前だと、思っているのは、ただの錯覚なのだ。それを教えてくれたのが、あなたの死…だったから。

先日、あるかたから、こんなことを言われました。「頭ではわかってるけど、どうしても実感できない。つい、また明日もあると思ってしまう」

それはね。ある意味、幸福なことなのです。私は、10代のときに、ひとは、必ず死ぬ、ということ、実感してしまっただけです。そのときから、「たぶん、明日も生きている」ということが、

信じられなくなってしまったのです。

だからといって、毎日、おびえて生きているわけではありませんが、こころの深いところに、どうすることもできないかなしみが、横たわっているのを、知っています。そのかなしみとともに、生きることが、私にとって、生きるということなのです。

よく言われることばですが、今日という一日は、今日を生きられなかった誰かが、生きたかった一日です。実感はできないとしても、せめて、そのことに思いをやってみませんか。

明日死ぬかもしれないと実感できないということは、明日も生きられると、漠然と信じられるということでもあるのですから、その明日という一日を(そして今日という一日を)、自分にとって、最高のものとして、あたえてください。誰のためでもない、自分自身のために。

…19歳だったあなたの、変わることはない、笑顔を、今日、久しぶりに思い出しました。

19歳だったあなたが、もう一度、同じ年を繰り返しても、まだ追いつけないくらいの年月を、生きてしまった私が、本当に、あなたにたいして、恥ずかしくない生きかたをしてきたのかどうか…。

今日は、しずかに、振り返ってみたいと思います。

そして、明日があるかもしれないことを信じて、今日を、そして、明日を、真剣に生きてみようと思います。

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、**2003年11月1日**創刊。**2011年10月**、**2900**号達成。3秒で読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>